

大切な人の最期、

どのようを送りたいですか？

人生の最期、どこで旅立ちたいですか？



誰にでも訪れる人生最期を支えるセカンドライフ

交通事故で娘を亡くした定年間際のビジネスマン柴久生(榎木孝明)。自殺を図ろうとした彼の耳に聞こえた「生きろ」の声。それは友人、川島の最期の声だと、彼の「看取り士」だったという女性から聞かされる。「看取り士」とは最期に残された時間、旅立つ人、送る人に寄り添い支える人のことだった。5年後、柴は岡山県高梁市でセカンドライフを「看取り士」として9才の時に母を亡くした23才の新人高村みのり(村上穂乃佳)たちと最期の時を迎える人々を温かく支えているのだった。

自分らしく旅立つ・・・

高齢者社会となり、また、人間関係が希薄な今だからこそ考えなくてはならない、如何に死の瞬間を迎えるのか？

一般社団法人「日本看取り士会」の代表理事を務める柴田久美子さん、多くの方を看取り、温かい時間を共に過ごしてきた彼女の経験が本作の原案である。主人公柴久生の生き方を通して「如何に生き、死を迎えるのか」の意味を伝える。そんな死生観をテーマにした企画に賛同した榎木孝明が自ら出演を決め、新人看取り士高村みのり役を1,200人のオーディションから選ばれた、新進女優、村上穂乃佳が演じる。齋藤暁、つみきみほ、仁科貴、石濱朗、大方斐紗子、高崎翔太、宇梶剛士、櫻井淳子等がわきを固め、監督は「ママ、ごはんまだ？」(17)等を手掛ける白羽弥仁。やさしく、豊かな時間が流れる岡山県高梁市を舞台に最期を見守る看取り士の姿から、<生きる希望>を共感できる作品が完成した。

「看取り士」とは？

誰にでも訪れる最期の時、住み慣れた自宅や、本人の希望する形で、温かい死を迎えるために旅立つ人、送る人をサポートし、医療行為はしないけれどもそれぞれの心に寄り添いながら見届ける人。現在、日本には約540人の看取り士が活躍している(日本看取り士会調べ)



【Movie In Education とは】

映画の楽しみは千差万別。優れた映画には様々なメッセージが込められており、映画から学べることも少なくありません。集まった人々が映画を観て何かを感じ、学んだことを共有しようと始まったプログラムがムービー・イン・エディケーションです。

街カフェコクーンは『拠り所の形成』を目的としてコミュニケーションプログラムを開催する交流施設です。